もうすぐ六月も終わりです。この六月、別な言い方があって「水無月」とも言います。

梅雨で雨も多い六月。「水の無い月」なんていう言い方は変だと思いませんか。実は、「みなづき」の「無＝な」は当て字で、昔は「な」＝「の」だったのだそうです。つまり水無月は「水の月」のこと。雨の多い六月が「水の月＝水無月」という説は、何となく納得がいきます。

さて、近頃、家の近くで大きな輪が飾られている神社を見てはいませんか。

それはきっと、六月三十日に行われる「夏越の祓＝なごしのはらえ」の準備中の神社です。六月は、一年十二か月の半分の月。一年の半分を過ごしたところで、チガヤという植物を編んで作ってある大きな輪＝「茅（ち）の輪」をくぐる儀式が「夏越の祓」です。「茅の輪くぐり」をすることで、病気や災いを免れることができるとされ、本格的な夏に向けて無事に過ごせるように願いを込めて「茅の輪くぐり」をするのだそうです。

十二月三十一日を「年越し」と言いますね。その半分の六月三十日が「夏越（し）」という訳です。

六月が一年のうちの半分というのは、何となく分かりますが、本当は六月三十日が一年のピッタリ半分という訳ではありません。

一年のピッタリ半分は、七月二日です。一月一日から七月一日までが百八十二日。七月二日が百八十三日目。その後十二月三十一日まで百八十二日あります。ほら、七月二日が一年のど真ん中だということが分かりましたか。

ついでに言うと、七月二日のお昼の十二時が、一年の本当のど真ん中という訳です。

七月二日（土）は、学校説明会がある登校日です。二校時の授業を終えて家に帰り着き、お昼を頂く頃が、一年のど真ん中、折り返しの地点です。一月一日に立てた目標を思い出し、うまくいっているのか、すっかり目標を忘れていたのか振り返ってみてください。

順調に進んでいるのならそのまま進んでください。「まずいな…。」と、感じた人は、まだ間に合います。折り返し地点からペース配分を考えて、目標に再チャレンジです。「もう半分」ではなく、「まだ半分」もあります。挽回は十分に可能です。

「水無月」の話に戻りましょう。東京の人たちにはあまり知られていないようですが、特に京都の方々がこの時期に食べる習慣のある和菓子も「水無月」と言います。「これを食べないと本格的な夏が来ない。」と考える京都の人が多いようで、京都が本店の和菓子屋さんで、今週なら、東京でも売っている可能性があります。これが「水無月」です。

おいしそうでしょ。三角形の白のういろうを氷片に見たて、上に「まめ＝魔滅」の意味の小豆を乗せたお菓子で、暑気払いと魔除けの願いを込めて食べていたようです。京都の人たちは、夏越の祓・茅の輪くぐりを終えて、家に帰ってから食べたのかもしれませんね。

その昔、貴族の人たちは「氷室」と呼ばれる、山の中に掘った穴の中などに、冬場、氷や雪を詰め込んで保存していました。

旧暦の六月、貴族たちはその氷を取り寄せ、暑気払いをしていました。

「氷室」と言われる天然の冷蔵庫のような所に、夏まで保管していた氷は、とても貴重で、当然庶民の口に入るようなものではありませんでした。氷が手に入らない庶民は、知恵を使って、三角形の白のういろうを氷のかけらに見立て、小豆を乗せた和菓子の「水無月」で暑さを乗り切っていたという訳なのです。

（立教小学校校長　田代　正行）